

対談 インターネットの彼方に 第1回

糸井重里

I T O I S H I G E S A T O

×

小崎哲哉

O Z A K I T E T S U Y A

構成：長野弘子 photo：Kaizuka Jun-ichi

インターネットがこれだけ一般的になった今こそ考えてみたい。ネットによる幸せってなんだろう？ eコマースやオークション？ 知識欲を満たすこと？ 見知らぬ人と「つながる」こと？ どれも結構だけれど、それ以上の可能性を秘めているメディアがネットではないだろうか。その巨大な可能性について、シリアスに、でも肩の力を抜いて考えている人たちと、今月から続けて話をしてみたい。

小崎哲哉

アイデア主導の「賛成運動」を！

小崎：糸井さんは「インターネットにはもっと大きな可能性がある」とおっしゃっていますが、『ほぼ日刊イトイ新聞』（以下、ほぼ日）でその可能性を具体的に探っているような気がします。大胆な仮説を立ててみたのですが、『ピクリハウス』の「ヘンタイよいこ新聞」も『週刊文春』の「萬流コピー塾」も、同じ共同体づくりとはいえ、村レベルだった。でも今回はバーチャルな「国づくり」を試みているのではないのでしょうか。

糸井：国ですか、大きいですね。一番わかりやすいのは、「間借り」か「持ち家」かの違いだと思います。僕は基本的に職人出身ですから、すべては請負仕事なんです。たとえば、法隆寺を建立した大工は他人のために寺を建てたのですが、インターネットでは土地代がタダだから自分のために建てられます。自分を資本にして、道を作ることから隣人との話し合いまで全部やったらどうなるかを試してみました。

小崎：でも、コストは相当かかりますよね。

糸井：コストとリスクですね。最高の仏壇職人がいても仏教が滅びたら仏壇は必要なくなるので、いくら「この透かし彫りは俺にしかできないぜ」と言っても仕方ないわけですよ。基盤を作るためには、リスクを負うだけの価値はあると、『ほぼ日』をやればやるほどわかってきました。

小崎：仏教のたとえが出ましたが、糸井さんは著書で「あらゆるものは宗教で、『ほぼ

出入り自由の宗教かもしれない



ITOI SHIGESATO x OZAKI TETSUYA



日』もそうだ」と書いていましたね。僕は「出入りが自由」という点で、『ほぼ日』は宗教じゃないと思っているのですが。

糸井：出入り自由ってことを盛んに言う理由は、自分の生活が一番大事だということを強調したいからです。インターネットの世界で使われる「管理人」という言葉がよくできていると思うけど、『ほぼ日』はそれに近いですね。あの幹事が宴会やるんだったら行くということはありませんね、でも普段は自分の生活が大切。『ほぼ日』もそんな選択肢の中の1つでいいんですよ。

小崎：『ほぼ日』国家論を思い付いたとき、僕の友人のアーティスト、インゴ・ギュンターが1995年に始めた「難民共和国」というプロジェクトを思い出しました。彼は、1450万人（当時）の難民を潜在的な労働力とみなして、世界中の投資家に投資してもらい、難民はそれを元手に仕事をして、投資家は上がった利益を回収するという計画をインターネットを使って呼びかけたのです。彼の考える国とは地域に根ざした概念ではなく、バーチャルでも構わない。彼はコンセプトを提示しただけでしたが、糸井さんはそれを実行していますね。

糸井：地域を超えたいというよりも「できることを先にやろう」というのが僕なりのやり方です。そういえば先日、作家の重松清さんと話していたとき、「僕らって反対運動の世代だから、定年退職するとそれを地域社会に持ち込んで何でもかんでも反対し

ちゃうんじゃないかな」って（笑）。だから僕らは「賛成運動」をしよう。たとえば家の前にマンションが建つとき、反対するのではなく、そのマンションに対して何ができるかというアイデアを生まないと賛成運動はできないんですよ。保証金が欲しいのか、引っ越したいのか、それとも向こうのマンションを見返すような塔を建てたいのか知りませんよ。でも、おもしろいアイデアが生まれて、それに賛同する人が出てきたら、あらゆることが可能になる。いまの難民の話もそうだけど、これまでは国家や政治に対して反対してきたのに対して、難民共和国は一種の賛成運動ですね。

小崎：バカボンのパパみたいだ（笑）。

糸井：そう。だって、「これでいいのだ」なんてアイデアなしには言えないですよ。それを生み出す努力に人間の智恵は使われるべきです。この視点で見るといろんな問題が解決できるんです。たとえば、僕はいま農業にすごく興味をもっていますが、日本では働き手がいらないから、東京都の7倍もの面積の耕作地が余っているんですよ。失業者がいて耕作地が増えている。すると、「農業の賛成運動」ができるかもしれません。インターネットも同じで、議論する暇があったらできる範囲でやればいい。

インターネット的な情報のつなげ方

小崎：休耕田って、減反政策で日本中に余ってますよね。僕も数年前に、友人たちと

米作りの真似事を3年間やりました。

糸井: その可能性ってあるんですよ。単純に数字をじっと見ているだけでも日本は農業輸出国になれるとわかるのに、今はいわば「総務部のやたらと多い農業」で、食品を管理する人や肥料を売る人などの数のほうが多い。知り合いが休耕地の話を書いて「まさか」と思って政府機関に確認したら、桁も間違っていないし数字も合っていると。そこで「東京都の7倍になっちゃうんですけど」と言ったら向こうは「え、そうなんですか」と驚いたみたい。

小崎: 考えてないんですね。普通のビジネス感覚でいったら信じられない。

糸井: 要するに、感動がないから数字が数字のまま置き去りにされている。世の中そんなことだらけです。教育だって農業と言えますよね。選ばした作物ばかりを育てていると土地が痩せてしまうように、学校もいい素材だけを集めて教えるわけにはいかないんですよ。インターネットの話ではないですが、ドイツでは市民菜園による野菜が全出荷の3割もあるんです。途中でコブになって詰まっている情報をつなげて循環させる、これが「インターネット的」なんですよ。

小崎: 都会と田舎の間にリンクを張るということですね。

糸井: そう、第1次産業と第3次産業にリンクを張ることで、農業は第4次産業になる。この発想は、インターネットにどっぷり

浸かっていなかったら思い付きませんでしたね。情報やノウハウを共有できたら世界は広がる。企業の多くは「社会の役に立ることが喜びである」と企業理念に掲げているのに、その手前の利益を上げるところで止まっています。起承転結で言うと、転のところは利益や労力、時間などが「コブ人間」みたいに溜まっている。その循環をよくすると、意外と第1次産業のほうに流れたり、サービス業がすごくクリエイティブになったりするものです。『ほぼ日』に投稿してくれる読者とのやり取りでも、それまで冷たかった人が優しくなり、嫌がっていた人が知らないうちに協力してくれるということがよくあります。僕は農作業をやっていたんだなあという感覚で物事を見られるようになりました。

小崎: 休耕地でも土地を1年間休ませて、あざみなどを植え、掘り返して肥料にしますよね。そうした循環が必要なのですね。

糸井: 無駄に見えることが実はすごく大切。僕はもともと効率主義ではなかったもので、超効率的なITの世界でも同じようにやって、何度人に意見されたことが。

倫理観の要らないボランティア活動

小崎: 「インターネット」と「インターネット的」とは違いますよね。僕は糸井さんがインターネット的だと言う「リンク」「フラット」「シェア」「グローバル」という4つのキーワードには励まされたんですよ。僕がやってい

る『REALTOKYO』にはリンクはもちろん、情報を分け合うシェアもあるし、パイリンガルで作っているのがグローバルだし、アマチュアのイベントからハリウッド映画まで並べて載せるからフラットでもある。

糸井: アンチテーゼとしてではなく、「ほんとはこっちでしょ」という気持ちなんです。ネットバブルの時期は、僕らのやり方は間違っていると思われていました。でも時間が経ってみると『ほぼ日』も黒字ですからね。その代わりにプロデューサーの僕が、芸人や物書きの僕を雇ってコキ使っているようなものですが……。

小崎: 主人と奴隷を同時にやっているわけですね(笑)。国であれば相容れない立憲君主制と共和制という2つの制度が共存している感じですね。

糸井: そうそう、飯食いにいくときに、みんなの意見を聞くところにも行けなくなりませんか。そのときに「焼き肉」と叫ぶことが親切なんです。その意味では王様は必要、立憲君主制です。それを突き詰めていくと、王様は国民の奴隷なんです。バスを運転するときに、みんながスピード出して追い抜くの喜びなら、追い抜いてみせましようという気持ちもあるわけです。

小崎: 誰が強いるわけでもない純粋なサービス精神ですね。ところで『ほぼ日』では、オンデマンドに近い形での商品開発も行っていますが、これも共同体先にありきで、いわゆるeコマースとは発想が逆です。また、クレジットカードも作っていますよね。いま地域通貨が話題になっていますが、人の倫理や自主性に委ねられる部分、パブリックでどこでも使えるはずの通貨が閉じているという部分が気にかかっています。

糸井: 閉じた共同体の約束ごとという意味では、ボランティアが行き詰まっているのと似ています。だから『ほぼ日』では、ボランティアを倫理観と関係なくやろうと計画しているんですよ。善意も悪意も関係なく民間企業のように考える。これは遊べるし、人も救えますよ。自分のためになるこ

利益はあとからついてきた



ITOI SHIGESATO × OZAKI TETSUYA



とと誰かのためになることが一致すると、生きていく喜びになりますよね。そういうことを絶えず考えるのが多分『ほぼ日』の仕事で、それがお金にならなくても、その価値をわかってくれる人は支援してくれる。

小崎: インターネットでも4000万人が使ってますよと言うとき、使っていない18000万人はどうかと思いますよね。

糸井: そうですね、インターネットに関してはやっていない人のことを先に考えました。実は餅は餅屋のときには忘れちゃうんですよ。だから、素人としてモノを考えたということがどんなに大事なことが。先にやってる人の特徴なんですけど、自分の単語カードを増やしていくことに夢中なんですよね。本当は自分は7割の側にいると意識するためには知性があるんですよ。

小崎: これからは難しい言葉ではなくて、普通にしゃべる「町の言葉」の時代になると書いていらっしゃいますが、糸井さんは、『ほぼ日』でそれを実践していますね。いろんな糸井さんの思いが実際に形に現れてきたのが『ほぼ日』だと思いますが、これからのビジョンを聞かせてください。

糸井: リンクがもっと激しくなり、自分で100メートルを10秒で走れなくても友達が行ければいいというような共有が増えてきます。すると個人の欲望もたいしたことなくなると同時に広がりますよね。その広がりの価値を追求していきたい。賛成運動の源になるような「アイデアありき」という考えも証明し続けたいですね。

小崎: 企業の社会還元も増えていますし、その兆しは見え始めていますよね。そうなるとう冒頭の『ほぼ日』国家論としては、入国管理のない国家といったところですか。

糸井: そうだなあ、人はいっぱいいるけど戸籍登録されていない「超無人島」かな。モスラが発見された島は国連には参加してないけどモスラは存在している。そんな感じじゃないでしょうか。

小崎: やっぱり『ほぼ日』国家論は取り下げます。税金もないですしね(笑)。



対談 インターネットの彼方に 第1回

糸井 重里

ITOI SHIGESATO / いとい・しげさと
1948年群馬県生まれ。広告コピーを手がけながら、ゲーム制作、作詞、詩、エッセイ、小説などの活動を行う。1998年よりインターネット上に『ほぼ日』刊イイトイ新聞を開設。著書は『インターネット的(PHP新書)』『ほぼ日刊イイトイ新聞の本(講談社)』など多数。 www.iiot.com

×

小崎 哲哉

OZAKI TETSUYA / おさき・てつや
カルチャーウェブマガジンREALTOKYO発行人兼編集長。1955年東京生まれ。1989年、都市型文化情報誌『03 TOKYO Calling』の創刊に副編集長として携わり、96年にはインターネットエキスが日本テーマ館『センソリウム』のエディトリアル・ディレクションを担当する。 www.realtokyo.co.jp

イベントを開催します。

インターネットマガジンでは、本連載と連動したトークショー形式のイベントを開催します。次回は7月3日(水) @六本木THINK ZONE。ゲストはミュージシャンの佐野元春さんです。詳しくは本誌ウェブサイトをご覧ください。なお、座席数に限りがありますので、受付終了となった際にはご了承ください。 internet.impress.co.jp



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp